

数々の出会いを経て

武田明日香

誰しも人や風景、作品などと出会い、感銘を受ける。私の場合、それが演劇だった。演劇を通して多くの人と出会い、多くの作品と出会った。

宝塚歌劇団との出会い

中学3年生の試験前日に友人が漫画『ベルサイユのばら—愛蔵版—』を貸してくれた。勉強の合間に「少し休憩」と称し、魔の扉を開けてしまい、そこから一気に『ベルサイユのばら』の世界に引き込まれた。半年も経たないうちに、NHKで宝塚雪組の『ベルサイユのばら』が放映されていた。杜けあき演じるアンドレと一路真輝演じるオスカルに虜となり、宝塚を知るようになった。丁度その頃は「『ベルサイユのばら』初演から15年目の再演となり1991年まで各組で上演され、初演時に劣らぬブーム」⁽¹⁾となっていた。星、花、月組でも上演され、第2次ベルばらブームにどっぷり漬かり、ヅカファンとなった。約4年間毎公演、劇場に通っていた。

佐久間先生との出会い

2年間の厚木キャンパス生活を経て、ゼミを選択する時が来た。当時私の進学した英米文学科にはイギリス演劇とアメリカ演劇のゼミがあった。どちらのゼミにしようか非常に迷ったところではあったが、シェイクスピアを研究するイギリス演劇のゼミに魅かれ、門を叩いた。これが佐久間先生との出会いである。

佐久間ゼミでは数か月に1回、ゼミ観劇デーという日が設けられ、舞台をゼミ生皆と観劇した。今までは東京宝塚劇場、日生劇場、帝国劇場などでミュージカルを観ることが主流であったが、このゼミを通して紀伊國屋ホールや東京グローブ座などでストレートプレーと出会うきっかけとなった。観劇後は舞台の感想などを皆で熱く語ったものだ。

他にも合宿では各班に分かれ、別役実作品を実践発表したり、先輩や同級生と共に佐久間劇団を立ち上げ、授業内で朗読を披露したこともあった。歌舞伎俳優を特別講演としてお招きしたり、イギリスからカンパニーを招聘したりする際に、ゼミ生はアテンドしプロの方たちと身近に接することができ、かなり活発なゼミであった。この準備する楽しさが後に仕事となるとはその時全く予想だにできなかった。

異国との出会い

大学卒業後は、佐久間先生の後押しもありイギリスに留学することとなった。演劇を勉強するため、ロンドン大学ゴールドスミスカレッジのシアターアーツの大学院に進学することとなった。この学部大学院に進む大半の学生は俳優もしくは劇作家を既に生業としており、自分たちの仕事を更に充実させるために学ぶ人たちだった。プロ意識の高い集団に足を踏み入れた私は、演劇全般を学べるドラマトゥルクを専攻した。ここ近年、日本でも少しずつ浸透し始めている「ドラマトゥルク」という役職は、主に舞台芸術における知的助言などを行う。当時は助言などできる能力を持ち合わせていなかったが、ひたすら劇場に通い、舞台を観続けインプットしていった。

グローブ座、ナショナルシアター、バービカンシアターなど毎週どこかの劇場に足を運んだ。ジュディ・デンチやヘレン・ミレン、アラン・リックマンの演技を間近に見ることができ、俳優の凄みを体感した。印象的だった舞台は、英国ロイヤルバレエ団による『ピーターラビットと仲間たち』。ダンサー皆着ぐるみで踊るという衝撃的な舞台だった。躍動感があり、皆大きな被り物を被りながらクルクルとターンをしていく。しかもその中にテディと呼ばれていた熊川哲也も出演していた。世界が絶賛するほど小柄でありながら力強いジャンプに感激したことを今でも覚えている。演劇を数多く観ていると、時にノンバーバルの舞台に大きな影響を受けることがある。

1年間の留学生活を終えたものの、もう1年勉強する道を選ぶことにした。次にロンドン大学ロイヤルホロウェイのシェイクスピアの大学院に進んだ。イギリス人は修士を2年間かけ学ぶことができるのだが、留学生は同じ分量を1年で終わらせなければならない。ゴールドスミスでは理論と実践が半分ずつだったが、今回は理論のみの学科である。30～40冊の本を毎週読むことはこの1年以外、後にも先にもない。お城のようなキャンパスに時折ウィンザー城にいる鹿や孔雀が散歩しに来るというのどかな環境の下、ひたすら本を読み、課題に追われていた。

趣味が旅行ということもあり、この2年間、イギリス国内やヨーロッパ諸国を周遊することも大きな財産となった。

劇団俳優座との出会い

帰国後、劇団俳優座制作部に就職することができた。劇団俳優座とは文学座、劇団民藝と並び日本の演劇界を支えてきた三大新劇の1つである。戦後は思想を掲げることなくアカデミズムを目指し、シェイクスピア、チェーホフ、ブレヒトなどの作品を多く手掛け、演出家の千田是也や初代水戸黄門を演じた東野英治郎、初代大岡越前を演じた加藤剛、コマキストという造語ができるほどアイドル的存在だった栗原小巻などが所属している劇団である。2000年に入社、世間ではミレニアムと騒がれた年である。21世紀の幕開け公演

としてシェイクスピアの『十二夜』の上演が既に決定していた。シェイクスピアを学んでいたということもあり、まだ研修期間であったが座組に入れてもらえることとなった。「俳優座としては4度目の再演であったが1959年の初演以来三神勲の翻訳が使用されていた。」⁽²⁾今回も同じ三神訳であったが、音楽劇であることと、言い回しに古めかしさを感じる部分があったため、許可を得てセリフを書き変えていく工程があった。その際に原文からかなり飛躍してしまっていないかの確認や時代考証など、まさにドラマトルクの作業を担うことができた。

制作部の仕事はそれぞれの団体によって境界線が異なる。規模の大きな事務所や劇場であれば制作業務と営業は部署が分かれている。しかし新劇の制作部は制作、営業、票券、広報すべてを担う。演目のレパトリーが決まったところで制作担当者が振り分けられ、予算立て、配役管理、スタッフ依頼、チラシ・ポスター製作、台本製作、稽古スケジュール管理、チケット販促、DM 発送など仕事は山ほどある。1つの作品が起動する1番最初から、本番を迎え、幕が下り、決算報告する1番最後まで携わるのが制作である。

他にも機関紙製作、演劇鑑賞会の企画会議への参加、旅公演の準備などの業務もある。そんな中、原稿依頼業務もしており、劇作家、新聞記者や演劇評論家、著名な執筆家と会いする機会が多かった。そこで見聞きすること、また入社した頃はまだ築地小劇場で教えを受けていた俳優たちも数多く所属しており、過去の話を通じて直接聞くことができた。歴史のある劇団だからこそそのような貴重な体験をすることができたのだと感じる。

『十二夜』の公演は成功を収め、再びシェイクスピア作品を上演することが決定した。演目決めの相談をされた際に、佐久間先生の講義で学んだ『から騒ぎ』が印象深かったため、早速提案した。目撃やうわさ話によって翻弄される若者とアラフォーの2組のカップルの恋の行方を描くこの作品は、2003年の正月公演に『恋のから騒ぎ』として上演されることとなった。三神訳がなかったこともあり、翻訳の依頼を初めて受けた。そのため2002年は『十二夜』の旅に行きながら翻訳作業も同時進行で行うという茨の道であったものの、この作業が後に舞台化されることを励みとした。テキレジが終わり、読み合わせが始まり、立ち稽古、美術が決まり、と目の前で少しずつ形になっていくことに喜びを実感するものだと思っていたが、それほどでもなかった。以前、演出家から「自分の仕事に満足したら終わりだ」と言われたことがある。それがこの感覚なのだろう。

劇団俳優座には約10年在籍し、16本の舞台を制作した。書下ろし作品にも関わらずなかなか筆が進まない作家をホテルに缶詰めにしたところ翌朝逃げられていたり、大作上演のため通常の2倍以上の予算がかかりそうになり資金集めに奔走したりなどハプニングも日常茶飯事でよく起きていたが、そういった点も含めて楽しみながら縁の下の力持ちとして従事することができた。

10数年経た今、特別講師として新入社員研修を行っている。退職しても未だ昔のように接してくれる劇団員に感謝している。

作品との出会い

現在は日本工学院専門学校で声優・演劇科の教員をしており、声優や俳優を目指す学生たちの担任をしながら、演劇スタッフ科の授業で演劇史を教えている。演劇史では、佐久間先生が翻訳された『演劇概論－ソフォクレスからピンターまで』や『演劇の解剖』、『世界演劇辞典』をバイブルにギリシャ演劇からピンターまで網羅している。また毎年声優・演劇科と演劇スタッフ科両学科で文学座と劇団青年座の演出家の下、卒業公演を開催している。数10名の同世代たちが集合した班を2つ運行していく上で、いつも作品選びに難航している。

ある日、先生が夏にイギリスでご覧になって良かったと紹介された舞台が『キャリーの戦争』（ニナ・ボーデン原作、エマ・リーヴス脚色）、児童小説を舞台化した作品だった。本を取り寄せ、読み進めるうちに卒業公演で使用できるのではないかと、演出家に相談した。英文しか手元になかったため、自ら荒訳し渡したところ、そのまま翻訳し直して使用することとなった。この作品に出演した学生たちが今、文学座や劇団昴の若手俳優として奮闘しているのは感慨深い。この翻訳で信用を得ることもでき、2年後の卒業公演で『エレファント・マン』を翻訳することができた。気が付けば専門学校でも19本の舞台を制作していた。現在20と21本目に取り掛かっている。

多くの出会いを経て

思えば佐久間ゼミに入っていなかったら私の人生はどうなっていたのだろう。留学していただろうか。要となる作品と出会っていただろうか。翻訳できただろうか。大きな出会いの紐を手繰り寄せると佐久間先生と結びつく。今後も様々な出会いがあるであろう。新たに挑戦することもあるかもしれない。次にある出会いを探しながら、そこに再び佐久間先生と結びつくのか、期待が高まる。

（日本工学院専門学校 声優・演劇科教員）

註

- (1) 日本、宝塚歌劇「宝塚歌劇の歩み(1982-1994年)」〔<https://kageki.hankyu.co.jp/fun/history1982.html>〕（最終検索日 2022 年 12 月 29 日）
- (2) 大場建治「思い出の俳優座『十二夜』」（劇団俳優座『十二夜』パンフレット、2001 年）